

都島だより

発行責任者
榎本嘉信

〒179-0072
東京都練馬区光が丘3-3-5-209
TEL 03-3938-5183



関東浪速工業会 会報 2005年(平成17年)11月 第32号

事務局 馬江 治喜

〒234-0056
横浜市港南区野庭町696-6
TEL045-841-8885
E-mail umae2@m3.dion.ne.jp

題字デザイン 岡田宏三

NEWS32号

関東浪速工業会・現在会員数◆合計611名

◆M・機械130名、ME・機械電気25名◆A・建築110名◆E・電気・電子工学192名◆C・土木・都市工学55名◆C I・工業化学・理数64名◆L・普通13名◆工専22名



2005.1.28

平成17年度
総会のご案内

関東浪速工業会、今年度の総会を左記の通り開催いたしますので、ご多忙中のことと思いますが、万障お繰り合わせの上ぜひご参集ください

●日時 平成18年1月28日(土) 17時〜20時30分
●場所 鳩山会館・大広間

TEL・03・5976・2800

文京区音羽1-7-1

●親睦会費 8,000円(女性会員は4,000円)

●平成年度卒業会員は無料! フリードリンク

●同封の返信はがきに出欠をご記入の上必ず投函して下さい。

申込締切は平成18年1月10日です

鳩山会館にて開催



東京メトロ・有楽町線 江戸川橋駅1a出口 徒歩5分
護国寺駅 5番出口 徒歩7分

今回は日本の近代政治の舞台ともなった「鳩山会館」の大広間を貸切にて、総会・懇親会を行う企画といたしました。同級生等お誘い合わせの上多数のご参加をお待ちしております!



2階大広間

女性会員様へのお願い!
当日の御履物は床面の保護のためハイヒールをご遠慮ください。

企画一新

昨年度の総会御出席者

来賓	西野太一郎会長 森田靖治郎理事長 釜順子理事 秋山謹三学校長 近江巳記夫元科学技術庁長官			
機械科 7名	M26上田英雄 M42山口忠雄	M26玉城元市郎 H15土方英雄	M28橋本健治 清水一三雄 先生	M42前田範行
建築科 普通科 8名	A28岡田宏三 A38岩井浩一	A28酒井 保 A44水守恵子	A28森田幸博 A57信原利行	A37森 芳信 L28福田教子
電気科 9名	E13加藤利夫 E28永井備三 E36笹治博司	E16戸部 暢 E35田中 浩	E20眞鍋静夫 E35芳仲 宏	E28有井 章 E36竹村繁幸
土木科 8名	C 8山本義雄 C20木村又風	C18秋月勝美 C24土谷 覺	C18北里直行 C33明見和彦	C20榎本嘉信 C33松本信行
工業 化学科 3名	CI34柴田孝次	CI37五十嵐三喜雄	CI40菅家亘通	

合計 35名+来賓5名でした

都エトクラスの思い出

E13 加藤 利夫

級友榎本君は(社)浪速工業会関東支部に心から尽くしました。一年生から編集部にて校友会誌に文筆を揮っていました。二代目杉田校長は、少人数で校庭を占める野球部を廃止しました。野球好きの者は近くの鐘紡のグラウンドで軟式を楽しみました。精研の和田氏も榎本氏もメンバーでした。当時の教諭陣は充実され、教科の内容も良く実験、実習設備は高等工業並みに整っていました。E科にもM科の教科もあり、エンジン、ボイラー、工作機械とネジ切り迄しました。これらは社会に出て資格取得に役立ちました。学期末試験は無く不意打ちのテストでした。会社見学はよく有り、住電、関電、電鉄、NHK、阪大もあり卒業旅行でも富士、横河、宇奈月の水力発電と回りました。何れの時も先輩の方が案内説明

をされたので早く働きたいと思いましたが。登校時はご臨幸記念碑に敬礼し、名札を黒にして朝礼に出ます。その時、校外の対抗競技で優勝された報告があり先輩を尊敬しました。軍事教練は厳しく四年生から信太山演習や徒歩強行軍もあり卒業時に士官適、不適の印を押されます。毎年の運動会の応援練習、旭堂南陵さんの講話、名士の講演会、弁論大会は良い勉強になりました。担任は二年生から六年生まで持ち上りのため生徒の心情は良くご存知であり、八十五歳で天上される迄クラス会にはご夫妻で出席して戴きました。都工での良い習慣は始業時三分間の瞑想をしました。今も毎朝行います。掃除は六年生も一年の教室に来て指導しますので早くから上級生と馴染みました。精研の木内社長は六年生でした。九月一日は関東大震災を偲び昼食は麦飯でした。当時豊田佐吉翁が電池改良に百万円、今の百億円の懸賞を出しました。縁有り湯浅電池に就職、先輩も多く働き易く戦後も多くの後輩が入社し、今の浪速工業会のお役に立てている事も一つのご縁で有難く感謝しています。

(追記) 毎々関東浪速工業会のこと奉仕頂き有難うございます。Mニュース、ナカナカ内容充実され往時を思い浮かべながら読んでいます。お陰で私達の過ごした時や、クラスの事が次々と出てきます。関東浪速工業会で戦前在学中の方も少なくなりましたので、小生も忘れないうちに記しておこうと思ひ書きました。よい時代でしたのに勉学を疎かにしたのを恥じています。級友も戦死や病死で五十名が九名、クラス会出席者は六名です。関東浪速工業会で母校のことを知ることは人生の良い励みになります。これからも行事には努めて出るように致します。笹本氏は誠に惜しく毎々

冥福を祈っています。六年間の在学でしたから先生方のエピソードや、その他いろいろな事件などもありました。都工に学んだことは誇りでした。お互いこれからも健康に留意して一度の人生、今を大切に。

金田龍之介先輩の観劇会で

M26 玉城 元市郎

今年四月、新橋演舞場での公演、スーパー歌舞伎「ヤマトタケル」に続いて今回は三越劇場で劇団、朋友、の「明日の幸福」の公演に金田先輩は渡辺美佐子さん、竹脇無我さん、長山藍子さんと共に客演出演されました。当会でも観劇の手配を頂き、九月十七日は、計九名が観劇させて頂きました。物語は中野実作、石井ふく子演出で、昭和三十年代初めの頃?三代同居の大家族の松崎家の当主(大臣願望の経済界の大家)夫婦、裁判官の息子夫婦そして孫夫婦で、当主が大切にしている家宝の埴輪の馬が壊れたことから、自分が壊したと思ひ込んだ妻たちが家族を巻き込んで喜劇を繰り広げ、最後は当主の妻が床に叩きつけて粉々にした事によって、これまでの重苦しい松崎家の空気を解放し「明日の幸福」を予感させる家族全体の可笑のうちに幕が下ろされました。今回金田先輩は松崎家の専制当主の役を見事好演されました。公演が終わって三越食堂で、金田先輩を囲んで約一時間歓談させて頂き一人一人とコトバを交わされ大変楽しい時を過ごさせて頂きました。私は金田先輩への思い出として昭和二十年四月入学式の時、金田先輩が在校生代表として歓迎の言葉を頂いた事、そして昭

和二十四年都工演劇部員として武者小路実篤の「友情」の野島役の失恋の演技指導を頂いた事等、今回、直接お会い致し又お話しが出来て「今日の幸福」を感じた次第です。有難うございました。



参加者 計10名
9月19日 C18秋月氏・及び友人、C33松本氏夫妻、M36西村氏夫妻、E36馬江氏、E49高橋氏、M26玉城
9月23日 A27田中氏

NHK放送博物館を見学して

E36 竹村 繁幸

七月二十四日(日)台風七号が接近している曇り空の中、愛宕山の「NHK放送博物館」を見学しました。この見学会には榎本会長以下12名(内、小学生1名)の参加者があり、博物館の職員が我々のグループを専任で案内していただきました。歴代のラジオ、テレビ、レベリカメラ、マイク、スタジオオミニセット並びに放送原稿についてわかりやすく説明を受け、また懐かしく見学することが出来ました。この建物は1925年に日本で初めてラジオ放送を送信した場所であり、NHK放送センターが内幸町、渋谷と移転していく中、1956年に「放送博物館」としてリニューアルされた。1940年に東京オリンピック(戦争のため中止)に向けてのテレビ中継の研究

1945年の終戦時の「玉音放送」の舞台裏。現在のニュース番組の舞台裏等について私は興味津々となりました。

予断ですが、当館の職員の方は、わが先輩の松尾さん(E14年卒)が在職時にその部下だったそうです。見学終了後、集合写真をとり、隣地の愛宕神社にお参りして、自由散会となりました。皆様お疲れ様でした。



放送博物館 見学会 05724

観劇会へのお誘い

金田龍之介氏出演のミュージカル「ペガゾ・オペラ」の観劇会を左記の様に計画しました。ご家族等同伴者の参加も大歓迎です。多数のご参加をお願い致します。

開催日時 平成18年1月14日(土)12時開演
開催場所 日生劇場
参加費 A席 6000円
申込締切 12月20日
申込方法 参加希望者は、科、卒年、氏名、参加人数をTEL、FAX又はEメールにて左記迄お申し込み下さい。

申込み先 事務局 馬江 治喜(E36)
TEL・FAX 045-841-8885
Eメール uma2@n3.dion.ne.jp



第八回 桂米左氏 東京公演報告

E36 馬江 治喜

今回で連続八回目となった桂米左氏(A59卒)東京公演、例年通りお江戸日本橋亭にて。題名は「天狗裁き」と「景清」の二席で、久しぶりに米左氏のお話しを楽しみました。公演終了後、お江戸日本橋亭の前で、参加者全員で米左氏を囲んで記念写真を撮り、今後も10回、20回を目指して、大いに頑張っていたきたい旨、激励して散会となりました。



参加者 計10名
C18秋月氏、M26上田氏、M26玉城氏、A28酒井氏ご夫妻、E36石垣氏、E36竹村氏、A44水守氏、A47西口氏、E36馬江

四月の空 (前編)

C20 白井 利一

その日、昭和十七年四月十八日は学校の勤務奉仕で淀川の河川敷にある校所有のグラウンド滑空場の整地作業を行っていた。朝から晴天の爽やかな日であった。草も伸びて春の爛々けた午後の陽さしの中でシヨベルと鍬で掘った土を番(モッコ)で運び額や背中が汗ばんでいると突然：爆音が聞こえてきて、皆な空を見上げ

ると中型の飛行機が驚くほどの低空で迫って来て、耳を聳(ロウ)する金属音を残して西方に飛び去った。アツという間の出現に唖然としていた。双発エンジン、垂直尾翼が二枚、灰色胴体の機首が陽に映えた姿を至近に見て感動的であった。「胴体に星のマークがあったから毎日新聞の飛行機だよ」との声に頷いていた。その日の作業も終わって、川で用具を洗って解散となり各自が帰路に着いた。市電の停留所辺りまで来ると人々がざわめいていた。「一体、何処がやられたのかな?」「今、敵機は何処からだろう」「被害なしなら偵察機だよ」「何処から飛んで来たのだろう」その会話でアメリカ機の来襲を知らされた。「それじゃ、あの淀川での飛行機は：そうだったのか」と級友と顔を見合わせた。

日米が開戦して四ヶ月余の出来事である。アメリカは日本への初空襲を敢行した。サンフランシスコ港を出発した艦隊の空母にはB25爆撃機(陸軍)十六機を搭載して、日本に向かって隠密航海を続けていたところ、日本より千二百キロ点で監視船黒潮部隊に発見され打電される。敵艦隊発見セリ。犬吠崎ノ東方千二百キロノ位置ニ 空母ヲ含ム十七隻方西進中ナリ、殊勲の同船は巡洋艦により砲撃沈された。遙かなる洋上での孤独の水漬く屍である。四月十八日の早朝であった。

「黒潮部隊当時、海軍は遠洋漁船を徴用して改造し、監視船として太平洋上に配置点をさせていた。無線と機銃だけの装備で十七年二月に結成されて、静岡県焼津港を基地として隻数を増やし、二元隻中で残ったのが六隻、十代の若人が多く戦死者は二二名となる。敵に捕捉された日が命日となった。

米艦隊では緊急に作戦が変わり、日本の防空体制が整わぬ前にと：命令が下されB25全十六機は空母の短い二四〇米の滑走で次々と発進して日本を目指した。この「ドゥーリトル作戦(機長名)」の計画は爆撃機を、日本の攻撃できる

地点(七四〇キロ)迄運び、四月十八日の午後に進んで東京はじめ工業都市の夜間空襲を完了して西進、東シナ海を横断し中国東部の飛行基地で燃料補給して帰還するプランであった。しかし予定が十時間も早まり、距離も四六十キロ伸びる飛行を余儀なくされ、夜間を昼間爆撃の日程となったB25機の搭乗員の胸中は何であったろう。機長は各自の希望によって攻撃地点が決まり、視界から回避させるべく低空飛行となった。一方、すでに無電を受けていた日本側では四、五〇〇キロまで近接して来ないと攻撃機が往復(母艦へ)出来ぬと判断して、来襲は四月十九日と想定していた。この誤算は不利となったアメリカ側を一転させる運びとなった。機種が違うのである。

十八日の午前、鹿島灘から侵入した編隊は分かれて、八機は東京に向かい、十二時十五分に東京上空へ焼夷弾の投下攻撃が始まった。地点は牛込区(現新宿区)鶴巻町馬場下町(現地下鉄「早稲田駅」付近)で学校が多い文教地区であった。〇病院では屋上を貫通した弾が三階で炎上し、近所の食堂や米屋店も火災で百米ものバケツリレーに早大生も駆けつけ米俵運びも手伝って日頃は悪口を云われていた早大生の姿に住民は感嘆した。隣接していた早稲田中学校と早稲田実業学校も同時に被弾した。早稲田中学校は三年生までは土曜日で帰宅しており、四年生は休学時で、多くは春日和の校庭でくつろいでいると爆音が近づき上空がザーザーと鳴り出し、地響きが起った。生徒らは反射的に身を伏せた。後で数えると校庭に一三三発が落下(密度一米)に一人の犠牲者が出た。K君は左肩から心臓に至る直撃を受けて即死、医務室に運ばれて先生が弾を抜き取った。羽田飛行場の格納庫前で塚越氏朝日新聞社機神風号の搭乗者は、警戒警報が2時間も出っ放しで、解除を忘れていたのか：と雑談していると聞き馴れない爆音で双発機が低空で通過していった。「あ

れ、大日本航空(現：日航)のロッキードかな」と云っている中に、北東方面の大井町附近が火災の報があつて「空襲警報が鳴り響いた」「こりや本物だ!」と同僚と駆け出し、格納機を引き出し、の分散作業に大汗をかいた。(後編へ続く)



紙面の都合により掲載を2回に分けて頂きました。後編はMニュース33号にて掲載予定です。(編集担当)

ロボカップジュニア2005 日本大会・観戦記

E36 馬江 治喜

四月末頃、本部森田理事長より「母校の機械電気科が五月四日、五日と東京お台場の日本科学未来館で、ロボカップジュニア2005日本大会、へ3チームが出場する事となったので、応援に行つて頂きたい」との連絡が入り、さっそく関東地区在住の会員に連絡させて頂きました。初日四日は本部よりME41岩地氏が、関東よりC18秋月氏、A25西阪氏、CI20菅家氏が応援に来て頂きました。(他にも応援に来て頂いた会員の方もおられた事と思いますが、来館者が多く確認できませんでした)当初我々はロボカップ大会といえ、TVで放映されている、ラジコンでロボットを操作するものと思つていましたが、ジュニア大会は、マイコン・センサー等を車体へ埋め込んで、

車体自身がセンサー等で感知した状況をマイコンが判断して動作するようになっており、サッカーゲームの場合はオウンゴールが多く、レスキューの場合はコースを外れたりして、思うようにロボットが動いてくれない苛立ちがありました。この大会は年齢によるクラス分けがあり、「セカンダリ」クラスは、中学三年から高校三年生まで、「プライマリ」クラスは中学二年以下となっています。TVで放映されるロボカップ大会は年齢が高専以上となっています。引率された機械電気科科長の高田先生(49卒)のお話によると「このロボカップジュニア大会へ都島工が参加するようになったのは昨年からです、昨年は八位と残念な結果で無念の涙を呑んだが、来年こそは入賞するぞとの意気込みで生徒が頑張ってきた。それが今年はこのように三位に入賞できて本当にうれしい。そして今年七月に大阪で開催されるロボカップジュニア世界大会へ一チームが無条件で出場できることは大変嬉しい」とお話がありました。最終日の五日は各クラス各部門での表彰式があり、二位入賞の二年生二名に、大会委員長より銅メダルを授与された時には、都工の先輩として感激ひとしおでした。四位となった生徒(二年生)は本当に悔しかったと思いますが、又来年、創意工夫をして優勝を目指して頂きたいです。高田先生のお話では「予算も多くないなか、生徒は本当に創意工夫をしてこの大会へ参加したが、更に今年の世界大会および来年の大会に向けて大いに頑張りたい。又今回の日本大会出場に際し社団法人浪速工業会よりご寄付を頂き大変に有難い」とお話があった。浪速工業会・関東支部として今回は情報が入ったのが遅かった為、応援者が少なく申し訳なかったが、次回より関東へ

来られるときは関東支部へ直接、連絡頂戴できれば有難い旨、お願いをしておきました。関東支部の会員の皆様には情報が入り次第連絡させて頂きますので、ご多忙と申しますがご協力の程よろしくお願い申し上げます。



ROBOCUP2005



異文化交流の国 リトアニア

A27 田中 瑛也



写真1・トラカイ古城

バルト三国、エストニア、ラトビア、リトアニアの中で、南に位置するリトアニアは、他の二国と異なり南に向けた顔が、歴史を刻む。

ユーラシア大陸、ヨーロッパとアジアとの文化が混在している地帯で、アジア、アフリカ、ヨーロッパと三大文化が混在する地中海、この海に繋がる黒海と北の海であるバルト海との通商路に国土を持つリトアニアは、当然南からの文化も固有のバルト海文化に取り入れた。むしろ他の二国に比べて、クライペダの港を有する以外、海岸線も短く緑豊かな内陸の国である。この地にバルト系の一種族として住み着いたのは、紀元前二十世紀と長い歴史を持つ。歴史の歩んだ道も、隣国ポーランドと五百年にも及ぶ連合国家としての道も、国民にバルト民族でない異文化の香りを薫習せ

しめた。十四世紀から十五世紀にかけて、リトアニアの治世者ヴィタウス大公は、版国拡大して黒海沿岸にまで及ぶ領土を手の中にした。彼は西からこの国に、侵入を企てるチュウトン騎士団(プロシヤ)の攻めを、防御するために、同時に人心を掌握するための象徴として、現在のリトアニアの首都ヴィリニウスの近郊トラカイに城を築いた。城(写真1)は天然の湖上に浮かぶ。訪れた日、北国の空から垂れる重い雲、氷結した湖上の水面、墨絵の寒色の空間に暖色の城が浮上する。城の内部空間も東方的な雰囲気包まれ、ここがバルトの一国なのかと思いに襲われる。この城の一隅に黒海沿岸クリミヤからカムライ人の種族を居住させ、彼等から南方の文化を学び、生活に率先して取り入れた。今なお帰化した末裔は存続している。プロシヤとの戦いに備えて築城した城の門前で、艶やかな服装の老人が古きよき時代のドイツタンゴを、アコーデオンで奏でている。その音は古城を囲む湖上に響き渡り、歴史が遺した民の争いの怨根を、払拭させる境地に至った。

が三本に描かれている。左右両手を差し出しても救われぬ、人の手に神の手が救いを差し出すとされる。さらに聖画の左上の隅に飾られた浮き彫り群、ギリシャ神話に登場するメデューサの神、嫉妬に狂い男を睨み、石と化する。並んで東方タートル人がもたらした仏教の観音菩薩の容貌は、おそろくタートル人が交流のあったインド神像の化身と見られる。

ヴィタウス大公の時世を一世紀半、遡るがヴィリニウスの中心にミндаウガス王は、大聖堂を建設し、ローマンカソリック教を国教と定めた。元来自然崇拜の民が居住する国、この地にも雷神ペルナークスの祭殿が存立していたのを、壊し築いた故に雷公の怒りではないが、民の反感をかい幾度となく、破壊、再建が繰り返されて、現在の聖堂(写真2)は十八世紀に再建された建物である。マイルドな古典様式の建築は、自然との調和に力点を置き、天に居ます我等が父との、神への祈り信仰と趣を異にする。顕著に顕す例として、聖堂内部に設けられた礼拝所の一つである、聖カジミエルの礼拝所(写真3)に掲げられた聖画、聖人の手

異文化交流の足跡を聖堂の空間で見ると、リトアニア固有の宝は海神ユーラが落とした涙が、宝石と化した琥珀である。ダイアモンドの華麗な輝きではないが、かつてロシアエカテリーナ女帝が、ペテルスブルグの宮殿に隣接するロシア領、カーリングラードでロシア領が飛び地であるために、リトアニアは権益を得る。琥珀を売る店を数おおく見かけるヴィリニウスの街、文明は小さくても、きらりとひらめく宝石(写真4)のごとくあるべきだと唱える文明論者サムエル・ハンチントンの言は、リトアニアを琥珀に例えれば、まさに当を得ている。異文化の花園に煌めく宝石、リトアニアはこのような国である。



写真2・ヴィリニウス大聖堂



写真3・聖カジミエル礼拝所



写真4・琥珀の煌めき

訃報

- E・18 滝沢 勇氏
平成17年2月25日
- M・16 工東 恒夫氏
平成17年5月18日
- M・20 平岡 三男氏
平成17年1月31日
- M・29 土田 高義氏
平成16年11月3日
- E・35 木本 英輔氏
平成17年10月13日

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。